

がん社会 を診る

中川 恵一

世界保健機関(WHO)傘下の国際がん研究機関(IARC)がまとめた「世界がん報告2014」によると、12年に新たにがんと診断された患者は世界で推計1410万人、同年の死亡数は820万人に上ります。がんと闘っているのは3250万人で、治療費などがかかるコストは全世界で年間1兆1600億^{ドル}に達します。

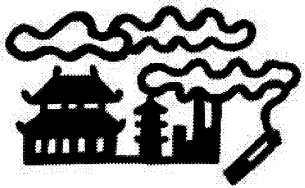
報告書は、20年後には患者数が年2200万人に、死亡数が1300万人に増えると予想しています。「がんは驚くべき速さで拡大している。治療では対応しきれず、予防と早期発見を強化しなければならぬ」と警告しています。12年の値を臓器別にみると、日本と同様に肺がんによる死亡が最も多く、年間159万人に上りました。また、肺がん患者の3分の1超にあたる65万人が中国人でした。

大気汚染、中国にリスク

世界人口に占める中国の割合は約2割です。いかに中国に肺がんが多いか分かりません。そして、25年には中国の肺がん発生数は年100万人に迫ると考えられています。日本の成人男性の喫煙率は3割程度ですが、中国では約5割に達します。喫煙者数は中国全体で3億5千万人と世界最大のたばこ消費国です。さらに、中国人の7割以上が日常的に受動喫煙にさらされているといわれます。

大気汚染も深刻で、北京市では昨年11月30日夜、健康への影響が懸念される微小粒子状物質「PM2.5」の濃度が1立方メートルあたり1000^{マイクログラム}(^{マイクロ}は100万分の1)を越えたと報じられています。これはWHOの基準の40倍超です。同市は12月に、最悪レベルの汚染を示す「赤色警報」を2回発令しました。これを受けて、在宅勤務に切り替えた日系企業もありました。

PM2.5は髪の毛の太さの3分の1と小さいため、肺の奥深くまで達し、肺がんのリスクを高めます。10年には大気汚染が原因の肺がんが世界で22万3000人が死亡したといわれます。IARCの担当者も「中国の大気汚染は20世紀末から劇的に悪化し、少し遅れて肺がんも上昇し始めた。喫煙と並び主因の一つとみられる」と話しています。景気減速に揺れる中国ですが、現地で働く日本のビジネススマンにとって、受動喫煙と大気汚染は新たな「中国リスク」といえるかもしれません。(東京大学病院准教授)



イラスト・中村 久美